

「商品の二要因 使用価値と価値（価値実体、価値量）」*

江原 慶†

2010年4月16日

1 本節の要約

1.1 使用価値と交換価値

「巨大なる商品集合」

＝商品の分析から始める理由

→ 商品は何らかの欲望を満たす「外的対象」

→ 物の二面性：質と量

物は様々な有用性を持ち、それは歴史的に発見される。物の量的尺度もそうである。

使用価値

- 「物の有用性は、その物を使用価値たらしめる」(K., I, S.50.)
- 「使用価値は使用または消費されることによつてのみ実現される」(ibid.)

使用価値の二面性

- 「富の素材的内容」→ 社会的形態と無縁
- 「交換価値の素材的担い手」→ 社会的形態と関連、考察の対象

商品の第一層が使用価値＝商品体で、第二層が交換価値＝商品の社会的形態

交換価値

交換価値は使用価値同士を交換する際の量的関係性であり、場合によって変わるので、「商品に内部的、内在的な交換価値」(ibid., S.51.) は形容矛盾？

→ 二通りの反証

1. 異なる交換価値は、一つの商品についてのものであるから、相互に等しくなければならない。
2. 二つの商品は等置されうるから、第三のものに還元しうる。

→ こうして「商品の使用価値からの抽象」が行われることで、異なる商品は「等量とされる」(ibid., S.51,52.)

第二層を更に二層に分解して、一方を表層的な交換関係、他方を共通な第三のものとする。以降、交換価値は前者の意味で使われ、後者が価値と呼ばれる。

* 2010年度経済理論演習(小幡道昭): K. マルクス『資本論』第1巻第1編第1章第1節

† 東京大学大学院経済学研究科修士

1.2 価値実体と価値量

価値実体としての抽象的人間労働

「今商品体の使用価値を無視すると、それに残るのは、ただ一つの性質、労働生産物であるという性質だけである。」(ibid., S.52.) (ここの「使用価値」は商品体の属性として使われている)

しかし、そのような抽象を行うと、「労働生産物の有用な性質とともに、それに表わされている労働の有用な性質も消失する」(ibid.) → 抽象的人間労働

→ 抽象的人間労働からなる「労働生産物の残り」は、「幻のような、同一の対象性」であり、「お互いに共通な社会的実体の結晶として、価値——商品価値である」(ibid.)

第三のものとは価値であり、その実体を抽象的人間労働が構成する。

価値量の規定

個人の労働は、社会的に平均的に必要とされる労働時間を支出する限りで、「価値の実体をなす労働」(ibid., S.53) である。

「ある使用価値の価値量を規定するのは、ひとえに、社会的に必要な労働の定量、またはその使用価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない」(ibid., S.54)

→ したがって社会的に必要な労働時間が変わると、価値量も増減する。生産力が上がれば価値量は減る。

使用価値、労働、価値の関係 (ibid., S.55.)

| | | | | |
|------------------|---|---|---|-----|
| 使用価値 | | | | × |
| 他人のための生産 (交換) | | | × | (×) |
| 価値 | × | × | × | × |

2 論点

物の二面性の指摘の意義

商品の分析から始めるといって、物の質と量の二面性の議論に入る。→ なぜ、物の量についてここで言及しなければならないのか。

質(有用性)の発見は歴史的行動で、量的尺度もその一種、と整理されているから、質 ⇒ 量とされている。

Kr., S.107,108.

商品—使用価値 $\left\{ \begin{array}{l} \text{質} \left\{ \begin{array}{l} \text{いろいろな有用性} \\ \text{「一定の諸属性を備えた物としての使用価値の定在」} \end{array} \right. \\ \text{量} \end{array} \right.$

→ 質と量は『資本論』ほど明確に包含関係として描かれてはいない。使用価値の「質」の2つ目の規定は、『資本論』では後景に退いている。

1. 使用価値概念の確定

質だけでは使用価値概念を商品体の意味に使えないため、量規定も質に従属するものとして規定されている。

2. 物と商品の関係の措定

商品概念の前提として、物のレベルで質と量が確立している必要がある。商品概念の拡大は、物概念の拡大を前提する。

使用価値概念の二重性

1. 使用価値=商品体 \implies 交換価値の素材的担い手

2. 使用価値=有用性 \iff 交換価値=量的関係性

Gr., S.740.

「使用価値が経済学の領域に入ってくるのは、それが近代的な生産諸関係によって修正されるか、生産諸関係を修正しつつその中に入り込む時点である」

=使用価値と社会的連関の相互媒介性への視角

「しかし実際には、商品の使用価値はひとつの与えられた前提、一定の経済的關係が表わされているその素材的基礎である」

Kr., S.108.

「使用価値であるということは、商品にとっては不可欠な前提だと思われるが、商品であるということは、使用価値にとってはどうしてもよい規定であるように思われる」

→ 不動の使用価値

交換価値から第三の要因の論証

ここは論理が二重になっている。後者はいわゆる蒸留法だが、前者はそれに還元できない論理を含む。

「しかし、x量の靴墨、同じくy量の絹、同じくz量の金等々は、1クォーターの小麦についての交換価値であり、x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々は、相互に置き換え可能な、あるいは相互に等しい量の交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表していることになる。しかし第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別されるある実質の表現様式、現象形態でしかない、ということになる。」

(K., I, S.51.)

→ この推論は正しいか？

A is B, A is C, A is B \implies B=C=D \implies (B=C=D)=X

蒸留法は、A=B \implies (A=B)=X

Kr., S.108.

たばこ=悲歌、宮殿=靴墨の例。

→ 『資本論』の1つ目の、等価形態の商品の等量性は指摘されていない。

価値の実体性と抽象性

『批判』には固有の価値概念は存在しない。

→ 価値実体として析出される抽象的人間労働とは別に、価値という概念が何故必要とされたのか。

「お互いに共通な社会的実体の結晶」

→ 実体性が抽象的人間労働にかかる要因なら、価値は抽象的人間労働の結晶として、より「抽象的」であるはず。

→ 価値の不可触性。ならば積極的規定は？

価値の量化の問題

価値量は社会的平均的労働時間で決まるとされているが、

1. 「社会的平均的」なるものの非実在性。

(a) 統計的な意味での「社会的平均的」の非実在。ex. 試験の平均点をとった人はいない

(b) いかなる経済主体にも知りえない。

2. 社会的平均的労働時間という尺度を否定する場合、価値に対する量概念の適用可能性そのものが問われなければならない。 ex. 重さ → 重量だが、美しさ → ?

参考文献

- Marx, Karl [1857,58] Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, in *Marx-Engels Gesamtausgabe* II-1.2, Dietz Verlag, 1981
- Marx, Karl [1859] *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe* II.2, Dietz Verlag, 1980
- Marx, Karl [1867] *Das Kapital : Kritik der politischen Ökonomie*, Buch I, in *Marx-Engels Werke*, Band 23, Dietz Verlag, 1962